

## キャンパス・コラム

稲の葉、先ちょに朝、露が光る

五十有余年前、午後十時の夜行列車で東京駅を旅立った。国鉄連絡船で、瀬戸の対岸高松港に着いた頃、東の空が白み始めた。予讃線の急行S.Lが西に向かい、灌漑用水の池を鏝めた地帯を車窓から眺めていた。雨が少ない讃岐特有の風物。

一片の薄雲に遮られていたのか、朝陽がさつと水田に射したとたん、視界いっぱいの稲田じゅうに、無数のダイヤモンドが七色に輝いて、縦横無尽に乱舞している。稲葉の先端、無数の露、射し込む朝陽、疾走する急行列車が、見事な交響映像「乱舞する七色ダイヤ」を創造した。

午後十時の夜行列車は無くなって久しいが、この映像に歓喜している青年が、今も居るだろう。だが、輸送の高速化で犠牲になったものも多い。

峨々たる妙義山。上越新幹線開通で、列車のレールが切れた。懐かしい、天を切り裂く稜線の妙義山が、上越線から消え去った。地下鉄道になって、旅人の楽しみを奪った。

すぐ目の前の交響映像にも、車窓からなかなか離れなかった妙義山とも、縁遠くなった。今キャンパスで、視線のさきに、足元にある楽しみは？

梅は小さな実を結び始め、正門からゆっくり進めば、もう桜は満開。あちらの芝生もこちらの芝生も、あおい芽を伸ばし始めている。西門から入って急坂を登るとき、右手の芝生に目を凝らして見ていると、いずれそのうち、あちこちに、5センチ、10センチと伸び上がってくる。古来からの日本の草、モジズリ、別名ネジリバナ、忍ぶ草の一種。先の方にピンクのちっぽけな花がいくつもいくつも捻れ捻れて付いている。可憐な姿を愛でながら、昔むかし、万葉の忍ぶ恋路を想像するのの一興。

広報委員 竹内 祐治（商学部教授）

## 編集後記

「絶景かな、絶景かな」。白い校舎に映えるピンクの桜をこういう思いで眺めるのも三度目となった。初めてこの景色を見た時は、右も左もわからぬまま。ただ「やつたるぞ」という野望だけが先行し、広大な舞台の上に立った▼そこには総勢三万人という大集団がキャンパス・ドラマを演じていた。もちろん僕もその一人のつもりだったが、なかなか芽の出ないまま一年が経った。ペデ上を歩いていた時、「学生記者募集」という一枚のポスターと、運命的な出会いをすることになった。それからの僕は、大学のスタッフとしての生活がスタートした▼これまでに有名な講演会、就職座談会での司会進行役などをこなしてきた。しかし、「好奇心を持つ」という、もっと大きな仕事があった。絶えず学内外にアンテナを張りめぐらし、三万人に役立つ「なにか」を探究する毎日だ▼さあ、新入生のみなさん、あなたも学生記者をやってみませんか。さまざまな出会いがあり、そこには「なにか」が必ず求められるはずですよ。きつと中大に対する愛着も増すことでしょう。|| 34ページ参照(船橋 智)

Hakomon  
ちゅうおう

'99・4月号(第147号)

1999年(平成11年)4月1日発行

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉 広報部広報課 ☎0426-74-2146

印刷 泰成印刷株式会社

〒130-0026 東京都墨田区両国3-1-12

電話 03-3631-8141